新聞天文記事評

いつもながら，各地で發行する日刊新聞紙上には，天文關係の記事が多い．ところが，此等の記事の中にはウツカリ信じられない無責任のものが少なからず，讀者を誤らせるものが夥しい．本會の急報や，其れを轉載するものは，勿論，最も正確であるし，又，學者の署名したものは，責任が明らかであるから追及し易い．（但し，署名したものでも，僞學者の書いたものには，極めて怪しいものが多い．例へば去る六月末，大每學藝欄に現はれた火星運河說に關するものの如きである．油斷はならない．）一般には社會面を賑はす天文記事は眞僞いろいろあるから，注意を要する．

下に，近頃の新聞記事に對して短評を試みる．

七月25日又は26日大每に出た“今年は彗星の豐年”といふ記事．之れは誠に良い記事で，本會の急報を能く消化してゐる．極めて信賴し得るものである．只，ヴイサラをヴイサラとし，キンネケをインネケとしたのは人名の誤り．

七月26日大朝に現はれた“越境する『赤い星』”といふ火星に關する記事．大體は良いが，大正十三年の時に火星が其の北半球を地球に向けてゐたといふのは誤りである．又，京大の兩博士が觀測指導をしてゐるといふのも誤り．

同日讀賣に出た“火星の大氣”を東京で觀測するといふ記事．之れは單なるニウスで，おくればせながら三鷹天文臺で火星のスペクトルを撮影しやう（それも，本式の研究觀測でなく，單に器械のテストだ）といふのだから，“壯擧”でも何でもない．此うした記事は書かない方が良い．書けば，日本學界のおくれを示すから，恥である．

七月27日都新聞に出た“ようこそ火星君！”は　大體は山本博士の著書“火星”を讀んで書いたものらしいから誤りは殆んど無い．只，火星研究からコペルニクの地動說が生れたとしたのは誤り．

七月28日大朝“火星近接，夜空を睨んで”といふ倉敷や大阪プラネタリウムの活躍記事．まづ無難である．

同日讀賣に出た火星記事で，三鷹や上野の狀況と，本會員伊達英太郎氏の活躍を取り扱つてゐる．短かい記事だが，誤りは無い．

同日大每學藝欄に載せられた星圖入りの火星の記事は，山本會長の手記を基としたものであるから，信賴して宜しい．但し，「北斗七星」は南斗の寫し誤り．

七月29日大每に現はれた“雲が阻んだ火星”は，短かい文だけれど，研究者の心境を傳へてゐる良い記事である．

尙ほ今後も短評を試みるにつき，遠近より切り拔きを送られたい．（編輯）